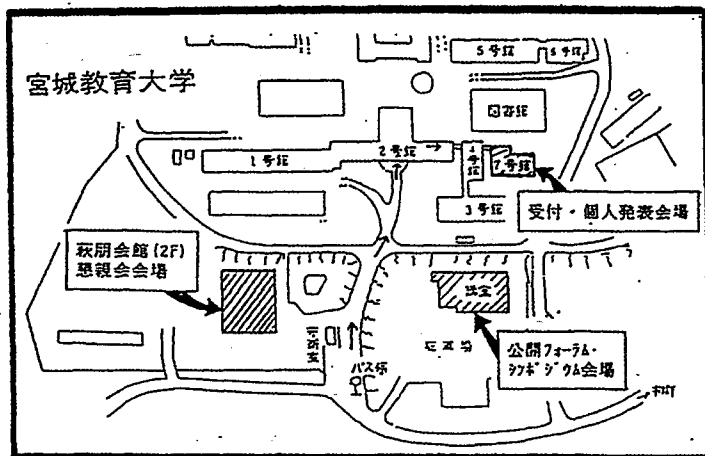


会場案内



日本スポーツ社会学会
第5回大会実行委員会
代表 近藤 義忠 (宮城教育大学)
TEL : 022-214-3456

日本スポーツ社会学会

第5回 大会プログラム

会 場 : 宮城教育大学

期 日 : 1996年3月28日(木)・29日(金)

第1日 3月28日(木)

【受付】 11:00~12:00 (7号館入口)

【理事会】 11:00~12:00 (214教室)

【一般発表】 12:00~14:00

第1会場 (721教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	12:00~ 12:30	サッカーのルールにしたがうということ： 解説における表象作業のエスノメソドロジー	岡田 光弘 筑波大学院	井上 俊 大阪大学
2	12:30~ 13:00	体操する身体： 日本人の身体技法とそれを作ったネットワーク	清水 諭 筑波大学	
3	13:00~ 13:30	身体の他者性と「同」としての遊び： スポーツにおける脱身体の社会学を目指して	松田 恵示 大手前女子大	平野 秀秋 法政大学
4	13:30~ 14:00	「サッカー」の誕生： 身体活動の「型」と「フォーメーション」から	加藤 朋之 筑波大研究生	

第2会場 (731教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	12:00~ 12:30	体育専攻学生の潜在的離脱意識に関する一考察	水上 博司 三重大学	桐田 克利 愛媛大学
2	12:30~ 13:00	福岡ユニバーシアードの研究(2)： 学生の大会としてのユニバーシアード	白石 義郎 久留米大学	
3	13:00~ 13:30	天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワークの 成立	前田 和司 北教大旭川校	日下 裕弘 茨城大学
4	13:30~ 14:00	相模社会を構成する人的ネットワークに関する研究： 「クニマチ」のネットワークを中心に	浅川 重俊 筑波大学院	

【キーノートスピーチ1】 14:00~14:50 (730教室)

《演 者》	齊 元鎮 (北京体育大学)
《演 題》	「中国における体育・スポーツ社会学研究」
《司 会》	森川 貞夫 (日本体育大学)

【公開フォーラム】 15:00~17:30 (講 堂)

『Jの風：地域スポーツを変えられるか』

- 《パネラー》 ◎石川 晋 (文部省体育局長任体育官)
「スポーツ政策の立場から」
◎遠藤 憲子 (東北通商産業局総務課庶務係長)
「プロ・チーム (ブランメル仙台) の設立にいたる論議から」
◎小幡 忠義 (社団法人塩釜フットボールクラブ理事長)
「クラブ・スポーツ (塩釜FC) の実践から」
◎高橋 義雄 (東京大学大学院教育学研究科)
「研究者の立場から」
《コーディネーター》 中島 信博 (東北大学)

【総 会】 17:30~18:15 (講 堂)

【懇 親 会】 18:15~20:00 (萩朋会館2F)

第2日 3月29日(金)

【一般発表】 9:30~10:30

第1会場 (721教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	9:30~ 10:00	M. Maussの『身体技法』の検討とその可能性	上野 広 上野学園大学	荒井 貞光 広島市立大学
2	10:00~ 10:30	身体障害者のスポーツ社会科学研究視点	藤田 紀昭 日本福祉大学	

第2会場 (731教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	9:30~ 10:00	スポーツ番組制作のフィールドワーク： メディア・スポーツの新たな研究視点	橋本 政晴 筑波大学院	亀山 佳明 龍谷大学
2	10:00~ 10:30	インターネット (WWW) によるスポーツ情報の 提供の事例研究	高橋 義雄 東京大学院	

【キーノートスピーチ2】 10:40~11:30 (730教室)

《演 者》	J. Mandle (米国コルゲート大学)
《演 題》	仮題「現代スポーツ理解へのオールタナティブー英国文化研究を越えてー」
《司 会》	松村 和則 (筑波大学)

【シンポジウム】 13:00~16:00 (講 堂)

『スポーツ社会学の理論的可能性を探る
その1：身体/BODYをめぐる』

- 《演 者》 ◎山下 高行 (立命館大学)
「カルチュラル・スタディーズと身体/BODY」
◎菊 幸一 (奈良女子大学)
「エリアス派スポーツ社会学と身体/BODY」
◎吉見 俊哉 (東京大学)
「わが国のスポーツと身体/BODY」
《司 会》 伊藤 公雄 (大阪大学), 上杉 正幸 (香川大学)

日本スポーツ社会学会

第5回 大会抄録集

会 場：宮城教育大学

期 日：1996年 3月28日(木)・29日(金)

【目次】

1. 公開フォーラム：『Jの風：地域スポーツを変えられるか』	-----	3 頁
2. シンポジウム：『スポーツ社会学の理論的可能性を探る その1：身体／BODYをめぐって』	-----	5 頁
3. キーノートスピーチ		
(1) 芦 元鑣 「中国における体育・スポーツ社会学研究」	-----	7 頁
(2) J. Mandle 「現代スポーツ理解へのオルタナティブ： 英国文化研究を越えて（仮題）」	-----	8 頁
4. 一般発表		
【第1日】（第1会場）		
岡田光弘「サッカーのルールにしたがうということ： 解説における表象作業のエスノメソドロジー」	-----	9 頁
清水 諭「体操する身体： 日本人的身体技法とそれを作ったネットワーク」	-----	11 頁
松田恵示「身体の他者性と「間」としての遊び： スポーツにおける脱身体社会学を目指して」	-----	13 頁
加藤朋之「サッカー」の誕生： 身体活動の「型」と「フォーメーション」から」	-----	15 頁
【第1日】（第2会場）		
水上博司「体育専攻学生の潜在的離脱意識に関する一考察」	-----	17 頁
白石義郎「福岡ユニバーシアードの研究（2）： 学生の大会としてのユニバーシアード」	-----	19 頁
前田和司「天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワークの成立」	-----	21 頁
浅川重俊「相撲社会を構成する人的ネットワークに関する研究： 「タニマチ」のネットワークを中心に」	-----	23 頁
【第2日】（第1会場）		
上羅 廣「テニス技術の再考：身体視座からのアプローチ」	-----	25 頁
藤田紀昭「身体障害者のスポーツ社会化研究視点」	-----	27 頁
【第2日】（第2会場）		
橋本政晴「スポーツ番組制作のフィールドワーク： メディア・スポーツの新たな研究視角」	-----	29 頁
高橋義雄「インターネット（WWW）による スポーツ情報の提供の事例研究」	-----	31 頁

第1日 3月28日(木)

【受付】 11:00~12:00 (7号館入口)
【理事会】 11:00~12:00 (214教室)

【一般発表】 12:00~14:00
第1会場 (721教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	12:00~12:30	サッカーのルールにしたがうということ： 解説における表象作業のエスノメソドロジー	岡田 光弘 筑波大大学院	井上 俊 大阪大学
2	12:30~13:00	体操する身体： 日本人の身体技法とそれを作ったネットワーク	清水 諭 筑波大学	
3	13:00~13:30	身体の他者性と「間」としての遊び： スポーツにおける脱身体の社会学を目指して	松田 恵示 大手前女子大	平野 秀秋 法政大学
4	13:30~14:00	「サッカー」の誕生： 身体活動の「型」と「フォーメーション」から	加藤 朋之 筑波大研究生	

第2会場 (731教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	12:00~12:30	体育専攻学生の潜在的離脱意識に関する一考察	水上 博司 三重大学	桐田 克利 愛媛大学
2	12:30~13:00	福岡ユニバーシアードの研究(2)： 学生の大会としてのユニバーシアード	白石 義郎 久留米大学	
3	13:00~13:30	天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワークの 成立	前田 和司 北教大旭川校	日下 裕弘 茨城大学
4	13:30~14:00	相模社会を構成する人的ネットワークに関する研究： 「タニマチ」のネットワークを中心に	浅川 重俊 筑波大大学院	

【キーノートスピーチ1】 14:00~14:50 (730教室)

《演 者》 芦 元鎮 (北京体育大学)
《演 題》 「中国における体育・スポーツ社会学研究」
《司 会》 森川 貞夫 (日本体育大学)

【公開フォーラム】 15:00~17:30 (講 堂)

『Jの風：地域スポーツを変えられるか』

《パネラー》 ◎石川 晋 (文部省体育局長主任体育官)
「スポーツ政策の立場から」
◎遠藤 憲子 (東北通商産業局総務課庶務係長)
「プロ・チーム (ブランメル仙台) の設立にいたる論議から」
◎小幡 忠義 (社団法人塩釜フットボールクラブ理事長)
「クラブ・スポーツ (塩釜FC) の実践から」
◎高橋 義雄 (東京大学大学院教育学研究科)
「研究者の立場から」
《コーディネーター》 中島 信博 (東北大学)

【総 会】 17:30~18:15 (講 堂)

【懇 親 会】 18:15~20:00 (萩朋会館2F)

第2日 3月29日(金)

【一般発表】 9:30~10:30

第1会場 (721教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	9:30~10:00	テニス技術の再考ー身体視座からのアプローチ	上羅 廣 上野学園大学	荒井 貞光 広島市立大学
2	10:00~10:30	身体障害者のスポーツ社会化研究視点	藤田 紀昭 日本福祉大学	

第2会場 (731教室)

No	時刻	演 題	発表者	司 会
1	9:30~10:00	スポーツ番組制作のフィールドワーク： メディア・スポーツの新たな研究視角	橋本 政晴 筑波大大学院	亀山 佳明 龍谷大学
2	10:00~10:30	インターネット (WWW) によるスポーツ情報の 提供の事例研究	高橋 義雄 東京大大学院	

【キーノートスピーチ2】 10:40~11:30 (730教室)

《演 者》 J. Mandle (米国コルゲート大学)
《演 題》 仮題「現代スポーツ理解へのオールタナティブー英国文化研究を越えてー」
《司 会》 松村 和則 (筑波大学)

【シンポジウム】 13:00~16:00 (講 堂)

『スポーツ社会学の理論的可能性を探る その1：身体/BODYをめぐる』

《演 者》 ◎山下 高行 (立命館大学)
「カルチュラル・スタディーズと身体/BODY」
◎菊 幸一 (奈良女子大学)
「エアリアルスポーツ社会学と身体/BODY」
◎吉見 俊哉 (東京大学)
「わが国のスポーツと身体/BODY」
《司 会》 伊藤 公雄 (大阪大学), 上杉 正幸 (香川大学)

公開フォーラム「Jの風：地域スポーツを変えられるか」

コーディネーター 中島信博（東北大学）

このフォーラムもまた、幾つかのネットワークが重なるなかで出現したと言えそうだ。まず最初に挙げなければならないのは、遠藤憲子氏（東北通産局）が関係した調査研究である。1992年から3年間、氏は地域振興課にいた。その間、スポーツを手掛かりとした産業振興や地域振興をテーマに研究会を組織したのだが、そのメンバーは実に広範な分野に及んでいた。多彩な委員のなかに、当初から参加していたのが小幡忠義氏（塩釜フットボールクラブ）であり、途中から関わったのが筆者である。

当時はJリーグ発足の時期であり、まさに「Jの風」を受けての研究会設立であった。さしあたりのテーマは、東北地方におけるスポーツと産業振興が掲げられていたが、「地域」や「クラブ・システム」をかなり意識した検討内容であった。

もう一つ思い出されるのは、地元仙台でも、プロ・サッカー・チームを設立しようという動きが、相当の盛り上がりを見せたことである。遠藤氏はその間の様々の事情を、比較的身近な地点から観察できた方であり、フォーラムにおいても報告の一部に「ブランメル仙台」をめぐる動きについて触れて頂きたいと考えている。

中央から東北に吹いてきたJの風は一方でブランメル仙台などのチームを生んだが、そうした、いわばトップ・ダウン方式によらず、それまでも地域で活動を積み重ねてきた実践家にも大きな影響を及ぼすことになる。先述の研究会のメンバーであり、ドイツ視察にも参加するなかで、地域スポーツクラブづくりを目指すことになる小幡氏もそのような地域リーダーの一人である。氏は30年あまり前に、仙台市近郊の塩釜市でスポーツ少年団を結成し、旺盛な活動を展開してきた。たまたま吹いてきたJの風は、氏にとって何だったのか。フォーラムでは実践家ならではの体験が報告されるであろう。

フォーラムにとって幸運と思われるのは、タイムリーにも、塩釜フットボールクラブが今年1月に社団法人に許可されたことである。四半世紀前（1970年）、メキシコ五輪当時のサッカー・ブームの追い風を受けて、神戸フットボールクラブが社団法人となって以来のことだという。フォーラムにおいては、法人化の意味を問うことも大きなテーマとなろう。

ネットワークに話を戻せば、かねてより小幡氏の活動に注目していた人のなかに石川晋氏（文部省）もいる。今回のフォーラムに氏の参加を強く要望していたのが小幡氏であった。そして、文部省もまさに現在、重点施策の一つとして「総合型地域スポーツクラブ」づくりの事業を展開している。塩釜フットボールクラブの実践例を文部省はどのようにみるのか、ぜひとも話をうかがいたい点の一つであろう。

最後になってしまったが、高橋義雄氏（東京大学大学院）はスポーツ社会学会の若手会員であり、『サッカーの社会学』（日本放送出版協会）の著者でもある。学会員以外の3人のパネラーが提示する意見を、研究者の立場からとらえかえす役割を担って頂くことになる。

フォーラムを設定するにいたった経緯は概ね以上のようなものである。地元企画という趣旨もあり、またパネラーの顔ぶれからみて、まずは遠藤氏と小幡氏に、東北地方ないしは仙台圏での具体的な動きを報告して頂くことから始めたいと考えている。遠藤氏の報告は、サ

ッカーに限ったことでなく、東北地方のスポーツ状況全般に及ぶだろうが、あえて一つの対比軸を設定するなら、ブランメル仙台と塩釜フットボールクラブがあるようにコーディネーターには思える。単純化すればトップ・ダウンとボトム・アップの違いに似たような問題があるように見えるのである。

地元からの具体的な報告を受けて、文部省の立場から、あるいは研究者からコメントを頂き、ディスカッションに入りたいと考えている。おそらく論点は多岐にわたると予想されるが、以下では、そのなかの幾つかを挙げてみたい。

一つには東北地方ないしは仙台圏での動きの特徴があるだろう。全国のなかでどのような立場に置かれているのか、あるいは地元の人々自体がこの点でどのようなイメージを持っているのか。（仙台はかつてプロ野球のフランチャイズとなったことはあったものの、それもほんの数年であったことが今でも語り種になっている。）

そもそも「Jの風」をどうみるのかも問題となるだろう。どの程度の強さで吹いているものなのか。これまで形成されてきたスポーツ・システムを揺さぶっているのかどうか。あるいはもっと根底から変革をせまるものとみるのかどうか。ブーム的な一過性のものにすぎないのか、それとも永続的なものとみるのかどうか。

もし一定の変革が起こっているとすると、従来システムのどこ部分においてであるのか。学校と企業に依存してきた日本のスポーツ・システム、というようによく言われるが、そのようなありようが変化しているのかどうか。

従来システムの形成には、文部省が主管官庁として大きな役割を果たしてきたが、システムの将来像をどう描くのか。そのなかで、たとえば学校制度との折り合いをどうつけるのか。たとえば、部活動という仕組みをどう考えるのか。地域に移行させるのかどうか。その他、地域スポーツの仕組みを考える上で、地域クラブをどう位置づけるのか。政策的にインセンティブを準備するのかどうか。

あるいは、文部省という枠にとらわれないで、いわゆる行政の縦割りの問題をどう克服するのか。またこれに関連して、国と地方の関係ないしは分担の問題も提起されるかもしれない。またマクロな政策形成という点では、いわゆる官と民の関係ないしは分担の問題もあると思われる。

塩釜フットボールクラブの法人化について、これをどう評価するのにも関心のもたれるところであろう。従来システムに風穴をあけることになるのか。この方向に誘導するような政策をうつのかどうか。新たなサード・セクターとして社会変革の担い手となるのかどうか。

その他、いわゆる大衆化と高度化、楽しみのスポーツ（みんなのスポーツ）と競技スポーツ（エリート・スポーツ）とのバランスを、地域においてどうとっていくのか。あるいは、こうした単純な二分法ですませられない多様な要求の噴出も予想されるが、あらたなシステムをどう具体化していくのか。

繰り返しになるが、フォーラムの中心テーマは「地域」にある。Jの風はさしあたり地域のスポーツにむかって吹いてくるにしても、問題はスポーツにとどまらず地域全般に及んでいくように思われる。地域のスポーツ・システムを構想することは、とりもなおさず地域づくりをどうイメージするかにかかわってくる。そのような地平をも意識しながら、活発な問題提起がなされることを期待したい。

【シンポジウム】

『スポーツ社会学の理論的可能性を探る』

その1: 身体/Bodyをめぐる』

報告1 カルチュラル・スタディーズと身体Body

山下高行 (立命館大学)

報告2 エリアス派スポーツ社会学と身体body

菊幸一 (奈良女子大学)

報告3 わが国のスポーツと身体Body

吉見俊哉 (東京大学)

《司 会》 伊藤公雄 (大阪大学)、上杉正幸 (香川大学)

今回のシンポジウムは、スポーツ社会学の理論的可能性を探るという企画の第一弾として開催される。この企画は、来年度の大会時に開催を計画している国際シンポジウムへと継承され、企画全体を通して、現時点でのスポーツ社会学の理論的パースペクティブを総合的に議論するための視座を提供することを目的とするものである。

本年度のシンポジウムにおいては、身体Bodyという、スポーツ社会学にとってきわめて重要と思われる課題をめぐる、現在の代表的なスポーツ社会学理論の切れ味を試すことを狙いのひとつとしている。現代ヨーロッパ、特にイギリスにおけるスポーツ社会学理論を代表するものとして、ブリティッシュ カルチュラル・スタディーズとエリアス派の二つの流れはよく知られている。今回のシンポジウムでは、まず、現在相互に論争を継続しているこの二つの理論的潮流の視点から、身体Bodyを論じていただく。その上で、日本の近代社会における身体・Bodyをめぐる、歴史的・文化的分析を加えることで、スポーツ社会学から身体Bodyを理論的・実証的に考察するための視座を探てみたいと思う。

シンポジウムにおいては、まず、山下氏から、ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズの観点から、身体とスポーツにかかわる諸問題を読み解くための視点を提供していただく。

カルチュラル・スタディーズは、思想一九九六年一月号でも特集が組まれているが、現代文化を理解する上で、幾つか重要な視角を提供しており、その影響力は今日、オーストラリア、カナダ、北米など世界的に広がってきている。それ自身の研究史的展開とその世界的広がりのおかげで、カルチュラル・スタディーズは、現在、多様な分岐を示すようになっているが、スポーツ社会学研究の領域では、カルチュラル・スタディーズの機軸であったヘゲモニー論が継承されている。J・ハーグリーブスの研究 (Sports, Power and Culture 佐伯・阿部共訳 スポーツ・権力・文化、不昧堂) や、A・Tomilison (Tomilison (eds.) Fiverling Circus: Money and Politics at the Olympic Games) などの研究にその典型を見ることができ、そこにはヘゲモニーという概念をキーとして、生活世界の重層的権力構造をポピュラー・カルチャー、スポーツの多様な諸現象を読み解くなかで明らかにし

ていこうとする志向が見られる。山下氏は、このようなカルチュラル・スタディーズの研究史の概略と、そこにおけるスポーツ社会学的研究の位置や性格、研究状況を説明し、その観点から身体、身体文化、スポーツの捉え方について論じることとなろう。

続く菊報告では主にエリアス派スポーツ社会学の視点からボディの問題が整理され論じられる予定である。

エリアス派スポーツ社会学の方法論的基礎は、人間を徹底的な相互依存関係の網の目 (フィギュレーション) に位置する存在としてとらえ、[個人-社会] のに二元的思考を脱却し、その存在をまさに過程 (process) として把握するところにある。身体との関連では、宮廷社会を題材として基本的に自然発生的な身体動作 (食事、生理的欲求に基づく行為、唾を吐くことなど) が社会の平等化への圧力によってマナー化されていく過程を社会発生的な羞恥心の増大と結び付け、多少なりとも自己強制的形態をとらされた身体の姿として説明する。

また、英国における近代スポーツの社会的発生という観点から、前近代的な暴力を伴うゲーム形態が、労働の分業化 (機能的民主化) と国民国家の形成による暴力の独占 (ポリスの発生) によって、身体および身体動作に対する暴力の自己抑制 (自己規律化) の増大に向かい、その意図せざる結果として近代スポーツが誕生したと、エリアス派は考える。その社会発生的な意味は、社会が暴力の自己抑制に向かう中で多少なりともその模範的形式として、すなわち社会的飛び地としてルール化された身体の暴力性を承認するという方向と、身体の自己規律化 (暴力のタブー等) の象徴として近代スポーツを承認するという二重性をもつ。エリアス派スポーツ社会学の身体論は、この二重性をめぐる近代スポーツ状況及びその中で身体のとらえ方をめぐってさまざまな議論を展開している。

今回の菊氏の報告では、以上のような基本的な考え方を踏まえて、特に文明化された身体の問題 — 身体社会化、身体合理化、身体個別化の進行とスポーツ社会学の理論的可能性を問いつつ、エリアス派スポーツ社会学における [現代スポーツと身体] 問題への応用可能性及びカルチュラル・スタディーズとの異同について考察がくわえられる。

最後に、吉見氏から、近代日本の身体をめぐる歴史的・文化的な分析が加えられる。吉見氏は、この間一貫して近代という時代の性格を、さまざまに現れる装置を分析することを通じて明らかにしようとしてきている。これまで取り上げられてきた題材は、博覧会、電話、大衆的宗教等さまざまであるが、そのひとつとして、運動会など、スポーツについてのすぐれた考察が含まれている。吉見氏の研究スタイルは、伝統的マルクス主義が取り上げてきた闘争局面からではなく、近代の諸装置を、変化、読み替え、摩擦、順応等々の、錯綜した、複合的かつ重層的関係として分析しつつ、生活空間のモノグラフィ的な解明を行うというものである。特に運動会を扱った論稿では、民衆の生活空間と近代との、生活の文法を巡る軋轢が、運動会という祝祭空間をめぐる双方からのせめぎあいのなかで分析されている。このような視点は、スポーツ空間と社会空間の諸関係を明らかにしていく上で、きわめて重要なものである。また、現代社会における、Jリーグやオリンピックをはじめとするスポーツ・イベントにおいて、さまざまに現れようとしている祝祭空間の生成とその性格を読み解く上でも、重要な視点を提供してくれる。以上のように、今回の報告では、この運動会という装置の分析を軸に、今日のスポーツの祝祭空間の問題にもふれていただく予定である。

また、本シンポジウムに先立ち、J・マンデル氏 (米国) による、発展途上国のスポーツに関するスポーツ社会学の理論的可能性と、その批判的検討をめぐる特別講演が予定されていることを付記しておきたい。

【キーノートスピーチ 1】

『中国における体育・スポーツ社会学研究』

《演 者》 芦 元 鎮 (北京体育大学)
《司 会》 森川 貞夫 (日本体育大学)

【キーノートスピーチ 2】

『現代スポーツ理解へのオールタナティブ：英国文化研究を越えて（仮題）』

《演 者》 J. Mandle (米國コルゲート大学)
《司 会》 松村 和則 (筑波大学)

サッカーのルールにしたがうということ：解説における表象作業のエスノメソドロジー

岡田 光弘（筑波大学体育科学研究科）

※対象： 1990年1月1日に決勝が行なわれたサッカーの天皇杯、決勝を中心に準決勝、準々決勝についても扱う。主な対象は、ハーフタイムに行なわれる解説者による分析、とくに、「チョーク・ボード」によって画面を加工し、視聴者に提示するさいの発話と画像である。解説者は、「チョーク・ボード」をもちいてサッカーの戦術、技術的な側面をヴィジュアルに表象するという作業をおこなっている。

※方法： 分析の予備作業として、当該の場面の発話をトランスクリプト、画面を静止画像のかたちでおこした。ここで用いているのは、一言でいって、エスノメソドロジー的な相互行為分析と呼ばれる手法である。（具体的な分析の提示は、学会当日に行なう。）

※概説： スポーツとは、もっとも単純にいうと「ルールと結びついた身体活動である」。まずはこのように定義しておこう。ルールは、明文化されており、それを定めたり、変更したりする社会的な組織化が存在する。このことによってスポーツは、ゲームとの種差をもつ。本報告の目的は、このような概念的な探究をさらに推し進めて、「スポーツ社会学」に新たな知見を提出することではない。これから行なうことは、スポーツをする人ならだれでも知っていることを、明確な形でデータに基づいて、提示するという作業である。それゆえ、具体的なスポーツの実践者が「私はそれを知っていて、それを行なっている」と主張することは、むしろこの考察が価値あるものであるための前提なのである。スポーツが、「ルールと結びついた活動」[Winch 1958]であるということを、そこでのルールがどのようなルールであり、どのようにして産出されるのかを明らかにしていこう。

[Elias & Dunning 1986] は、図柄もしくは相互関係という中心的な概念から、サッカーのゲームというものについて明らかにしている。彼らによれば、選手たちは、他の選手たちとの関係のなかで、不断に位置をかえる「各部分」によって構成される流動的なパターンを形成している。このパターンは、相互依存と競争という弾力的なルールにしたがって、フィールドのうえに特定の相関的、感情的な位置をえるのである。いわゆる社会学的な研究の対象とされやすい、スポーツを取り巻く諸条件ではなく、スポーツの内的な論理を汲おうとする点で、彼らの研究は、スポーツについての研究ではなく、スポーツの研究を意図しているように思われる。しかし、彼らはまだ、小集団の研究をしている。具体的な行為が生じる、実際の場面の研究をしてはいない。彼らの研究から、「小集団」について多くを知ることができるにしろ、それはサッカーについての私たちの知識には何ら影響を与えない。以下に示すようなエスノメソドロジーのプログラムは、スポーツ社会学という研究領域の進むべき道のひとつを示しているように私には思える。

1954年の有名なシカゴ裁判研究にさいして、Bales の相互作用分析の手法を用いるようにすすめたStrodtbeck に対して、Shils は、「Bales の相互作用プロセス分析を使うことで、陪審員の審議の何が、その人々を小集団とするのかは分かるかもしれない。しかし、その審議の何が、そのあつまりを陪審とするのかということ、私は知りたいのだ。」と

いったという。Garfinkel は、社会学者の務めとは、これまで無視されてきた「Shils の不満を調査可能な現象のアジェンダにかえるための技術的な方法」[Garfinkel et al. 1981] を提示することであるという。

ここでチョーク・ボードでの表象作業を扱うことで、明らかになるのは、専門家によってスポーツが、ルールとの結びつけて、どのように語られるかということである[Goodwin 1994]。話を単純化して述べておこう。たとえば、サッカーというスポーツにおいて、（適切な条件下で）ゴールにボールが蹴り込まれば1点になる。構成的なルールがこれを定義している。このルールの姿は、グラウンドに引かれたラインによって表象されている。スポーツがスポーツであるためには、こうしたルールが必要なのである。これに加えてスポーツにおいては、優先性のルール[Garfinkel 1963]も存在している。このルールはルールブックには書いていないし、グラウンドにも、これを表象するものはない。しかし、専門家によって明らかにされるのは、この優先性ルールの存在とその規範性である。

テレビ番組の視聴者は、アナウンサーの実況中継や解説者の解説によって、そこで何が起きているのかを知ることができる。「そこで起きていること」は、構成的なルールや優先性のルールが参照されることによって、意味を与えられているのである。そうした意味を知るために必要なルールは、ルールとして定式化されて「教えられる」のではない。アナウンサーや解説者の発話のシークエンシャルな含意や、テクノロジーの進展によって可能になった、さまざまな画面の加工技術によって映しだされる表象によって私たち視聴者は、スポーツの規範的な構造について多くを知るようになる。



画像例1

※アナウンサーと解説者の発話を分析するさいに注目した術語にこれ、いま、などの(indexicals)ライン、スペース、の(technical terms)がある。これらの発話が画面と、結びつくことで表象が受肉化する。

※参考文献：

- Elias, N. & Dunning, E. 1986 Quest for Excitement - Sport and Leisure in the Civilizing Process. Oxford, Basil Blackwell.
- Fele, G. 1994 Sociology of Action - Ethnomethodological Interpretations of Soccer. "Analisi della conversazione e prospettive di ricerca in etnometodologia".
- Garfinkel, H. 1963 A Conception of, and Experiments with, "Trust" as a Condition of Stable Coordinated Actions. Harvey, O. J. (ed.) Motivation and Social Interaction.
- Garfinkel, H., Lynch, M. & Livingston, E. 1981 The Work of a Discovering Science Construed with Materials from the Optically Discovered Pulsar. Philosophy of Social Sciences, 11:131-158.
- Goodwin, C. 1994 Professional Vision. American Anthropologist, 96(3):606-633.
- Winch, P. 1958 The Idea of a Social Science and its Relation to Philosophy. R.K.P.

体操する身体

一日本人の身体技法とそれを作ったネットワーク

清水 諭（筑波大学）

0. 先取りとしての身体と身体の奥底にあるもの

映像メディアにおける身体は、今や現実にある生身の身体のイメージをかけ離れ、テクノロジーとの合作によって身体が成り立っているかに感じさせる。コマーシャル・フィルムなど映像の中でスポーツする身体は、映像制作におけるテクノロジーの進歩とあいまって今後の我々の身体感覚を暗示しているかのようだ。

現代におけるこのような身体の実践やテクノロジーと融合した身体は、新たな身体文化の先取りとして考えられる。しかしながら、我々の身体の内底に根本的に存在し、払拭できずにある身体性がこれらと共に、あるいは、これら以上に大きな位置を占めていることは事実である。それを改めて認識しなければ、そこから自由になることは困難である。

1. 生活訓練と体操=規律・訓練的身体

保健・衛生を目的として江戸時代の末期に洋式体操が、そして明治11（1878）年の体操伝習所においては、「新設体操術」という名の軽体操、すなわち、その後普通体操（手具中心の軽体操で、矯正術、徒手体操、哑鈴体操、球竿体操、棍棒体操、木環体操、豆囊体操など）と呼ばれたものがG.E.Lelandの指導で普及した。

だが、明治18（1885）年に森有礼が文相になると、規律・訓練の身体を国家的に養成する政策を提示し、明治19（1886）年に公布された〈学校令〉には、教科として「体操」が位置づけられる。同じ年、森文相は「生徒ヲシテ順良信愛威重ノ氣質ヲ備ヘシムルコトニ注目スヘキモノ」¹⁾とさせる教員を養成するために〈師範学校令〉を公布した。そこでは全寮制寄宿舎による生活訓練、および兵式体操が導入された。青森師範の三年生だった張間多聞は、以下のようにその当時を回顧している。

「新校則では一切通学ということを許さず、全部寄宿舎に入れることになった。また寄宿舎内の人員の編成も軍隊そのまま、全体を一中队として、中隊長は舎監これに当たり、また三小隊に分けて、各小隊長あり、一小隊をさらに左右半小隊に分けて、半小隊長すなわち什長があり、半小隊をさらに二つに分けて分隊あり、分隊長すなわち伍長があった。

・外出時間などもなかなか厳しくて一分時といえども遅れるとすぐ始末書を取られる。それが三度目ともなると禁足といった始末であった。帽子の徽章が曲がっても舎監に呼びつけられ、上着のホック一つ外れていてもお目玉頂戴といったようなわけ。上長と話すには舎監の先生はもちろん、小隊長、什長、伍長に対しても直立不動の姿勢をとらねばならぬ。長上の命とあればいかなる命といえども服従で、もし不服があっても一旦服従の上改めて申しでよというのである。

それから兵式教練などなかなか厳重で、むしろ厳を通り越して酷というほどであった。何しろ銃を左右の手に一挺ずつ持たされて前後左右に動かすのであった。同じ動作を三回やらされるともう動かなくなる。すると陸軍から回されている現役軍曹が二名あてやって来た時代であるから、われわれを見ること兵卒のごとく、あらん限りの声を張りあげて「二つの拳銃を持っているものがそんなことでどうなるか」と怒鳴りつける。たまには背中をどやしつける。この人格を無視した横暴ぶりには誰も彼も憤慨せぬ者はなかった。お

そらく全国の師範生は挙ってそうであったらと思う。」²⁾

規則や命令に従順で、友情に厚く、権威に服従しながら、かつ自分でも権威を背景に行動する資質を教育の三徳性と考えた森は、身体そのものを規律・訓練する有効性に気づいていた。それは、明治24（1891）年の〈小学校教則大綱〉第11条に「体操ハ身体ノ成長ヲ均齊ニシテ健康ナラシメ、精神ヲ快活ニシテ剛毅ナラシメ兼テ規律ヲ守ルノ習慣ヲ養フヲ以テ要旨トス」³⁾とされていることからわかる。この時点で、体操は保健、衛生あるいは、健康よりも規則や上司に服従し、集団への従属感を高め、かつ集団行動の美的価値を強調するようにさせる「道具」となったのである。国家によって相違はあっても体操はナショナリズムの高揚に関与してきた。この「国」においても体操する身体はナショナルなアイデンティティの形成に深く関わることになったのだ。まさに、体操はM.Foucaultが「身体の運用への綿密な取締りを可能にし、体力の恒常的な束縛をゆるぎないものとし、体力に従順=効用の関係を強制するこうした方法こそが、《規律・訓練discipline》と名づけるものである。」⁴⁾と述べたものの実践なのである。

2. 体操する身体を作った人間のネットワーク=身体と身体との格闘

明治35、36（1902、03）年に川瀬元九郎と井口あぐりはアメリカから持ち帰ったスウェーデン体操について、生理・解剖学の原理に基づいた実践書を表した。普通体操と兵式体操が行われていたこの時の「体操」にこのスウェーデン体操、そしてスポーツなどを行う遊戯が加わり、体操や遊戯研究が盛んに行われるようになった。様々な体操に関する書物も発行された。文部省は、明治37年に「体操遊戯取調調査会」を、明治40（1907）年に文部・陸軍両省の「共同調査会」を設けて議論した結果、兵式体操は『歩兵操典』に準拠した軍事形式のもののみを行い、普通体操はスウェーデン体操を中心として行うことになった。大正2（1913）年、初の〈学校教授要目〉の草案を描いた文相永井道明は、以上のような流れに大きく関与した。

今回の発表では、この永井道明と彼によって東京高等師範に招かれた三橋喜久雄、それに対抗した嘉納治五郎、可児徳、ラジオ体操（1927）を作ったひとりである大谷武一、さらに、デンマーク体操を導入した玉川学園の小原國芳等を中心とした人的ネットワークを解明していくことで、いかに体操、すなわち我々の身体技法が作られてきたのかを見ていくこととする。スウェーデン体操（後にデンマーク体操に変わる）、スポーツ、そして教練が同時並行的に身体に刻み込まれていった当時の身体を学生や教員の言説から捉え、かつ、それを作った人物の相関図を描くことは、ひとりの人間の身体において様々な特質を持つ身体性の葛藤を見ることであり、また、どの身体がその社会の中で重視されるのかといった身体と身体との格闘を見て取ることである。このことは、この「国」の本来持っていた身体技法や身体観の上に、「近代」という名のもとに新たな身体性がかぶせられてきた状況を具体的に示すひとつの手がかりになるだろう。

【引用文献】

1) 発達史, vol. 3, p. 497.

2) 千葉寿夫：明治の小学校，津軽書房，1969, pp. 133-134.

3) 竹之下休蔵：体育五十年，時事通信社，1951, P. 30.

4) M. フーコー，田村俊訳：監獄の誕生，新潮社，1977, p. 143.

○松田恵示（大手前女子大学） 島崎仁（大阪教育大学）

はじめに

身体性というものが、スポーツという行為を捉える基点となることはあまりにも常識的である。「スポーツは身体活動だ」という言明は、ほとんど無条件で社会に認められている。しかし、昨年度の報告で示したように、この常識にはいくつかのレトリックが含まれている。そしてこの点にこそ、時代特徴的な社会関係を明らかにする糸口が存在を予感することができるのであった。同時に、このような常識が成立したメカニズムを探るという作業は、結果的に、スポーツ文化が固有に持つ意味や価値を明らかにし、それを十全に開花させる可能性の条件と構造を取り出すことにつながると思われる。スポーツという文化が持つある程度の普遍性を、この作業は問題としてどうしても抱え込んでしまうからである。スポーツと身体を一度切り離し、スポーツ社会学の基礎理論としてそれらを再度構成し直すというここでの試みの必然性は、以上の2つの点に根拠を持っている。

ところで、スポーツと身体に関わる常識の持つ奇妙さは、身体という言葉が行為に対して持つパラドックスの奇妙さでもあった。例えばここで、射撃競技とピアノ演奏の比較をもう一度考えてみよう。「身体」という言葉はこの2つの行為を「スポーツ」と「音楽」に分ける特性としてはたして機能するのかどうか。問題の焦点はこの点である。もちろん「スポーツ」や「音楽」は、「身体」的であるかないかのみによって概念構成されるものではない。しかし、ここでの問題はその点にはない。というのも、そもそも「身体」という言葉が、身体的にしか存在することができないという人間の行為を分類する指標になりえるのかどうか、まずそれこそが問題だからである。つまりすべての人間の行為は身体的であるより他しようがないのだから、「身体的行為」なる言葉はそもそも同義反復でしかないのである。だとすれば、ここでの問いの焦点は、スポーツという行為にとって身体という要素が、必要条件であるのか十分条件であるのかという、命題構造の吟味にあるのではない。それは、身体という要素がそもそも行為に関わって1つの条件となりうるのかどうか、つまり身体と行為に関わる命題の「真偽」判別の問題、あるいは同義反復として表れた身体と行為に関わる自己言及性の問題なのである。

ここに現われたスポーツと身体に関わる常識の亀裂を、「ピアノ演奏のパラドックス」と呼ぶことにしよう。つまりピアノ演奏のパラドックスとは、全ての行為は身体的であるより他存在のしようがないのに、スポーツという行為をくりかえし「身体」であると強調する論理矛盾をあえて行なうことで、社会的には意味が成立している（例えば「スポーツは身体活動である」という言明が意味を持つ）というある種のレトリックの持つ奇妙さである。我々はこのパラドックスをいったいどのように理解することができるのであろうか。またこのパラドックスを理解する過程で、我々はどのような視点からスポーツと社会を新しく読み解くことができるのであろうか。

自己言及性と意味の成立

「スポーツ（＝身体活動）は身体活動である」＝「AはAである」といった形で示される自己言及的な言明は、実質的にスポーツという言葉に少しの情報量をも付け加えることができないのであるから、論理的には無意味となるはずである。しかし現実こうした言明が意味を持つのは、身体という要素が行為に対して持つ自己言及的な形式を、「精神—

肉体」あるいは「意識—無意識」といった一般に身体観と呼ばれるものを共同体の成員が共有することによって、身体に「種差」を設け、巧妙にこの形式を非自己言及的な形式へと擬制することによって可能となるのであった。しかし、もしこのような形でしかのみ身体という要素がスポーツの意味をもたらさないのだとすれば、スポーツは常に身体観に支配されるという意味で、全体社会秩序による産物としてしか位置付かないという事態を引き起こしてしまう。事実こうした観点は、スポーツ社会学にあっても主たる構えであったように思われる。だが我々はこの地点を乗り越えていかねばならない。

ところで、そもそも意味が成立するということは、「正／誤」の弁別を可能にする他者との批判可能性の交換＝コミュニケーションを与件としている。ここでの要点は、コミュニケーションの相手である他者の他者性が、事態に偶有性を用意することで「他でもありえた」という弁別の外部（正／誤の2集合）を範囲として設定するとともに、弁別した答えが「他ではありえない」ことを指定する超越性＝必然性を用意し、その弁別に妥当性と正当性を同時的に与える点にある。しかし、ここでの他者とは、弁別の主体である自己にとっては本質的に不可知な外部としてのみ存在するのであるから、他者の同定（外部を外部として覚知すること）は、それを同定すべき自己の意識（内部）にのみ再帰的に見いだされるより方法がない。これはとても奇妙な方法である。このような「外部（他者）があるのは、外部（他者）があるからである」といったような説明は、しかし原理的には内部（自己の意識）にしかとどまることのできない我々にとって、その自己指示性はある程度隠蔽できる条件が整えば、唯一「それらしい」説明となるはずである。つまり、意味の成立とは、根本的に自己言及的な形式に頼らざるをえないのだ。

我々が「ピアノ演奏のパラドックス」に向かう当初の前提は、「いかにこの自己言及的な形式を克服すべきか」という構えにあった。しかし、これまでの検討から我々は以下のような修正を行なわねばならないだろう。それは、この自己言及的な形式こそが意味を生み出す積極的な作用素なのだということ、これである。そしてこの点に関わって、自己言及的な形式に現われる他者の種類によって、意味のもたらされかたが異なるのではないかというヒントが同時に浮かび上がるのである。

他者としての身体と遊びの生成

メルロ・ポンティは次のように述べる。「私の身体をしてけっして一つの対象でなく、決して『完全には構成された』ものでなくしている所以のものは、私の身体とは一般に対象が存在するようにさせている当のものだということだ」。ここで述べられる「対象化する身体」は、意識としての私には絶対に「対象化できない」という意味で、常に絶対的な差異と無限の距離を持つ他者＝外部として現われることが起こってしまう。そして、この「対象化する身体」として現われた他者性は、それが「他ではありえない」という必然性＝統制の側よりも、「他でもありえる」というこれまで潜在化していた偶有性＝自由の側を主題化してしまうとき、そこに「意識」としての内部と「身体」としての外部の中間に「間」を開いてしまうことになると思われる。ここで偶有性＝自由性のもとに開かれた「間」は、明らかに「遊び」と呼ばれる現象の祖型を整えている。こうして身体を他者として覚知する自己言及的な形式のうちに、それが持つあいまいさを「遊び」という意味充実として用意するコミュニケーションの可能性が示される。当日の発表では、「遊び」における意識と身体に関わる先行研究のレビューを含めることとここでの議論の補強を行なうとともに、こうした検討が広く全体社会を読み解く視点となりえる可能性について触れてみたいと思う。

「サッカー」の誕生

身体活動の「型」と「フォーメーション」から

加藤朋之（筑波大学大学院）

はじめに

人間の体の動き（身体活動）に社会を見つけたのは他ならぬモース（M. Mauss）であった。彼の身体技法（techniques du corps）に関する小論は注目に値する。あえて詳述するまでもなくここで「型（habitus）」の概念を提示している。しかしながらそうした視点からの展開は後の者に託されている。

とくにモースは、個人が獲得した「型」の社会性を中心に据え、「型」が社会性を獲得する点をあまり考慮していない。ゆえに「型」と「型」との社会的な関係が不明なまま、モースの挙げた「型」の例は雑多になり、結局それを整理し損なっている。そこで今回の発表はそこに注目したものである。

ただしそれについてモースはヒントも残している。それは「技術の型の伝達」である。「型の伝達」こそ社会的関係が表象される現場である。

「サッカー」という身体活動

今回採り上げるのは、日本の近代スポーツとして1873年に記録が残る「サッカー」である。直訳ならば足球とされるところのFootballを日本では蹴球と定めた。これは古来からの伝統技蹴鞠にちなんだのである。もちろん足で球を蹴るという身体活動以外共通性はない。「サッカー」は、日本の近代化の過程の様々な西洋の一つである。

そこで蹴鞠と「サッカー」の指導書を調べると、蹴るという技の「型」化に関する項目構成はほとんど変わらない。つまり蹴ることに近代はないのである。しかし「サッカー」の指導書は、複数の人々の「型」と「型」との関係（これを「フォーメーション」と呼ぶことにする。）までその記述は及んでいる。ポジションの役割や疑似試合といった項目で表されたこの「フォーメーション」に関する項目こそ今回の発表の一つの焦点である。

「サッカー」の普及における「フォーメーション」の正当化

本来「フォーメーション」は様々な人々の「型」の組み合わせであり、それは無数近く存在し、個人の獲得の対象という類のものではない。しかし「サッカー」が普及する過程で、その「フォーメーション」がいわゆる「型」化していく。その点に社会的関係を指摘することがもう一つの焦点である。

「サッカー」は、東京高等師範学校を中心とする学校教育システムを通して全国へ広がっていった。つまり「フォーメーション」の「型」化は明治後期の教育指導の場面で行われたのである。つまり「フォーメーション」をめぐる当時の言説の中に教化されてゆく様々な社会的関係が埋め込まれているのである。

おわりに

以上を受けて今回の発表は、近代的な身体活動をどのように日本人が受け入れたのか、そこには必ず日本の変容があるはずという立場に立って、蹴鞠の指導書「内外三時抄」と

サッカーの指導書の比較及びFootballが輸入され、「フォーメーション」が「型」化していく過程の言説の検討を行う。

そして最終的に辿り着くのは、Footballの近代的身体活動の側面だけでなく、他人との配置を監視する長の目の内面化の側面である。これは日本人のバナキュラーな心性に支えられた近代スポーツのパノプティコンである。

また今回は実際の指導場面には書及できないが、予備調査で得た示唆的な指導のやり取りを以下に挙げておく。

指導者「今日のゲームの課題は、両サイドのAとBを使って攻めること」

被指導者「A、B、常と呼んでくれ。その方がパス出しやすいから。常に監督の言ったことわすれるな」

指導者「どれだけ私の意図をチームが理解するかが勝負なんです」

「チームの全員がやることを少しずつでも解っていけば、きっと強くなると思います」

被指導者「コーチはやはり年齢がある程度離れている方がいい。やはり聞く耳もてますから、みんなの気持ちも分かってくれるし、お互いには本音あんまり言わないし」

指導者「常にまわりを気にしろ。味方が何を考えているか」

被指導者「全体的に悪くなったら指示して下さい。お願いします。」

体育専攻学生の潜在的離脱意識に関する一考察

水上 博司 (三重大学教育学部)

I. 研究目的

わが国の競技スポーツ選手の多くは、初期のスポーツ参加からライフステージの進行とともに、学校運動部を競技生活の中核に据えていることは周知のとおりである。ところが、筆者は、このことの再認識を求める意味で、国民体育大会出場選手の小学校期から社会人期までのスポーツ参加の活動空間を縦断的に明らかにしてきた(日本体育学会第44回大会発表, 1993)。また、昨年の本学会においては、競技スポーツ選手の離脱意識が競技生活のいずれのライフステージにおいて、選手自らが意識していたのかについて一定の見解を示してきた(日本スポーツ社会学会第4回大会発表, 1995)。

これら一連の研究は、競技スポーツ選手一人一人の小学校期から現在までの選手生活を送ってきた活動空間を縦断的(sequential)に追跡し、これまで経験的、実証的に指摘されてきた学校運動部を中核に据えた競技スポーツ選手の社会化過程についての再認識を求めようとしたものであった。同時に、ライフステージの進行とともに帰属意識の変更が迫られ、新しい帰属集団になじめず競技スポーツからの離脱意識を強くもつことを推測したものであった。

その結果、競技スポーツ選手は初期スポーツ参加の経験内容によって、その後のスポーツ参加における離脱意識に大きな影響を及ぼすものであることを明らかにした。換言すれば、比較的ジュニア期から組織的スポーツ集団に参加してきた選手は、離脱意識がその後のライフステージの早期に現れることであり、逆にジュニア期に組織的スポーツ集団へ所属せず、近隣の仲間集団で自由にスポーツ参加していた選手は、比較的遅いライフステージにおいて離脱意識が現れることが推測できるものであった。

以上のような傾向は、経験的に解釈できるものと考えられるが、研究の深化を図る上においては、ある規則性をもっているのかについて実証的に明らかにしていくことが必要であると考えられる。そこで本研究では、大学の体育学部所属の大学生を対象に、先述した一定の離脱意識の傾向を仮説とし、実証していくことを目的とした。調査対象者である体育学部所属の大学生は、国民体育大会出場選手に比べて、体育系大学への進学から共通の生活様式をもっていることが推測でき、また、過去の競技生活においても共有できるスポーツ経験にあると思われる。したがって、得られた結果がある程度一般化できる可能性があると考えたからである。さらに、一般大学生と体育専攻生との時系列的な比較検討を試みることで、仮説の検証を深めていく。

潜在的離脱意識とは、競技スポーツを辞めたいという直接的な逸脱傾向ではなく、スポーツ種目や競技生活、集団に対して嫌いになったという意識として捉え、調査対象者の過去の競技生活の自己認識を回答の上で顕在化させやすくできると考えた。

II. 調査方法

調査対象者のサンプリングにあたっては、全国の10大学を選定し、各大学に対してあらかじめ調査の趣旨および研究の目的、分析方法について説明をし賛同を得た。

その結果、体育学部をもつ大学4大学、一般の4年制大学4大学、短期大学2大学を選定することができた。また、選定に際しては地域性を考慮し、東北地区(1大学)、関東地区(2大学)、関西地区(2大学)、中国四国地区(4大学)の地区別のサンプリングを行った。

調査票は各大学の体育教官に対して、100部づつ送付し、授業時等を利用して集合アンケート方式によって実施していただいた。ただし、授業を受講する学生数が100名以上の場合はアンケートを実施する体育教官の判断で、100名以上の対象者に対して調査を実施していただくよう依頼をした。したがって、結果的に配布数は1,105名であり、回収数は1,071名となった。回収率は96.6%である。調査期間は1995年9月～10月である。

III. 結果と考察(一部)

図1は、潜在的離脱意識を小学校期は低学年・中学年・高学年、中学校、高校、大学はそれぞれ学年ごとにカテゴライズし、「体育専攻生」と「一般大学生」について比較したものである。

まず、中学一年生では、「体育専攻生」3.8%に対し、「一般大学生」は7.0%と高い値を示した。また、高校一年生では「体育専攻生」9.2%、「一般大学生」7.8%を示しており、両学生ともに潜在的離脱意識が高くなっていることが読みとれる。さらに大学一年生をみると「体育専攻生」16.4%、「一般大学生」2.8%を示し、「体育専攻生」と「一般大学生」との間に著しい差異を読みとることができる。以上のように中学、高校、大学期へのライフステージの進行にともって、これまでの帰属集団の行動様式や価値体系の変更が迫られ、新しい帰属集団になじめず、離脱意識をもつことが推測できる。

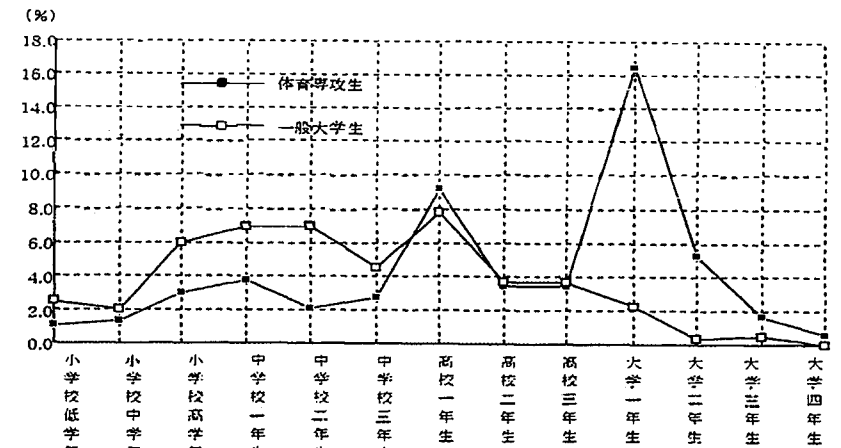


図1. ライフステージ別にみた潜在的離脱意識

これらの結果を踏まえながら、スポーツ参加の初期の集団所属のパターンから、その後の潜在的離脱意識を時系列的に解明し、ジュニア期の集団所属と離脱意識の規則性に一定の傾向が見られるのかについて明らかにしていく。

福岡ユニバーシアードの研究(2)

ー学生の大会としてのユニバーシアード

白石義郎(久留米大学)

1 問題

(1) 巨大スポーツ「大会」としてのユニバーシアード

ユニバーシアード「大会」は社会学研究に興味ある事例を提供する。なぜなら、ユニバーシアード「大会」は、今日の巨大スポーツ・イベントがどのような文化的・社会的基盤の上に成り立つか、また、そのスポーツ・イベントがどのような現実を＜構築＞するのかを手にとるように見せてくれるからである。

現代の巨大スポーツ大会は二つの論理の上に成り立つ。その一つは、スポーツ「大会」の論理であり、もう一つは開催する都市の経済的・政治的論理である。

「スポーツ大会」は「観る－観せる」関係において成り立つ共時的な意味空間であり、スポーツする人とスポーツを観る人を結びつける。さらに、「スポーツ大会」はスポーツの中に非スポーツ的なものを入り込む「通路」でもある。スペクテイター化が進行するスポーツ世界において、かつての巨大スポーツ大会を神話化した多くの論理はそのままでは通用しえない。スペクテイター・スポーツに適合した論理への組み替えが必要であるし、ユニバーシアード大会でもそれがおこなわれつつある。他方、都市が巨大スポーツ大会を招致するのは経済的・政治的な利害関心からであるが、それをあまりに露にすることは得策ではないし、巨大スポーツ大会のスポーツ・イメージを損なうという点で、むしろマイナスでさえある。そこで、大会側の論理と都市側の論理がそれぞれの思惑をもちながら、どのように結合し、どのようなスポーツ大会として＜構築＞されるのか、それは現代社会の構造とダイナミックスを知るうえで格好の研究対象である。

(2) 今回発表の焦点

以上の観点から、福岡ユニバーシアードの調査研究をおこなってきた。前回の発表では、招致理由の言説と市民参加の戦略を分析することにより、都市側のユニバーシアード＜構築＞の論理と戦略をみてきた。今回の発表は、ユニバーシアード大会の構築プロセスにおいて、「学生」という社会的カテゴリーがどのように位置づけられ、どのような機能をはたしたかを分析する。なぜなら、学生というカテゴリーはユニバーシアードの存在理由そのものであるが、スペクテイター化した巨大スポーツ・イベントになくはならないものではないからである。そのため、招致者である都市は学生というカテゴリーを大会＜構築＞の戦略の中に組み込む作業をおこなう必要があるためである。どのようにそれを言説化し、それがどのような結果を創りだしたかは興味あるテーマである。

2 考察

(1) 学生カテゴリーの言説戦略

福岡市、組織委員会、マスコミ報道を資料として、学生というカテゴリーがどのように言説化されたかを分析した。その結果は、以下の二点に要約しうる。

①学生＝アマチュアというイメージ化

この言説はスポーツへの好感イメージであるアマチュア性を取り込むことで市民のユニバーシアードへの好感度を上げる戦略でもあった。

②学生＝援助を必要とするアスリートというイメージ化

この言説はとりわけ発展途上国のイメージと結びつけられ、市民が「総ぐるみ」で支援するという市民参加(＝市民による支援)の言説と結合された。

(2) 学生カテゴリーの大会＜構築＞への組み込み

学生というカテゴリーが具体的に＜構築＞においてどのように実現化されたかを分析した。＜構築＞の過程において、戦略的な限定化が見られた。

①大会の盛り上げのためのボランティア学生と関連イベントの学生への呼び掛けの絞り込み。

構築の過程で学生ボランティアと組織委員会との意図のずれがおり、組織委員会によって選択的に絞り込まれた。

②「学生の大会」から「若者の大会」への言い換え

必ずしも意図的になされたわけではない。むしろ、学生と若者を当初からほとんど意識的に区別してこなかったことの帰結である。

(3) 学生の反応はどうだったか

学生というカテゴリーの言説化と学生への組織委員会のPRに対して、学生の反応はどうだったのだろうか。

この反応を分析するために、福岡市内の二つの大学で質問紙調査を実施した。そこで浮かび上がってきた反応の多くは、傍観者としての姿であった。

調査結果の詳細は当日発表する。

天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワークの成立

北海道教育大学旭川校 前田 和司

はじめに

天塩川は北海道の北部に位置する北見山地を源流とし、ほぼ真北に流れ日本海に注ぐ流路延長256km、流域面積5590km²の1級河川である。上流部に岩尾内ダムがあるだけで河口まで堰がなく約70kmの無堤区間も残されているなど、自然志向のカヌー愛好者には以前から注目されていた川である。1988年頃から流域市町村住民の間にもカヌー愛好者が増えはじめ、1995年までに13市町村のうち10市町村にカヌー・クラブが成立するまでに至った。それぞれのクラブは成立過程および活動目的に独自なものを持ち、なおかつ「天塩川」を媒介としてゆるやかなネットワークを形成しつつある。本報告は、天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワークの成立過程をたどるとともに、その特色と可能性について明らかにするものである。

(1)天塩川流域におけるカヌー・クラブの発足

発足年	ク ラ ブ 名	市町村名	会員数
1988年	北海道カナディアン・カヌー・クラブ		102名
1989年	美深アドベンチャー・プロジェクト・チーム	美深町	31名
	ナヨロカヌークラブ	名寄市	58名
1990年	サロベツ・アウトドア・カヌークラブ	幌延町	35名
	ながかわカヌー愛好会*	中川町	
1991年	サフォークランド・カヌークラブ	士別市	21名
	中川手作りカヌー研究会	中川町	40名
1992年	しもかわカヌー倶楽部	下川町	38名
	天塩アドベンチャー・カヌークラブ	天塩町	31名
1993年	ウッデンカヌーワットサム	和寒町	14名
1994年	ふうれんカヌークラブ	風連町	未調査
1995年	剣淵カヌークラブ	剣淵町	未調査

* 1992年、中川手作りカヌー研究会に合併

(2)北海道カナディアン・カヌー・クラブの果たした役割

北海道カナディアンカヌークラブ（以下HCCC）は、1988年、和寒町住民を中心に手作りカナディアン・カヌーの普及を目的に結成された。その活動方針は、上流から市町村単位に川下りイベントと手作りカヌー教室を開催し、HCCC自体の拡大をはかるというよりも、各市町村にクラブを発足させることを目指したものだ。その意図は、「カヌーが生活文化になっていくためには、その地域の風土を反映したカヌーでなければならない

い」というHCCC代表のS氏の言葉にあらわされている。上流から河口まで、山地、平野部、そして湿原地帯と異なった環境に適したカヌーがあると言うのである。カヌーを自作するノウハウがその実現を可能とした。結果的に、手作り志向、自然志向の順風を受けて、わずか7年間の間に、天塩川流域に11のカヌークラブが結成され、会員数はHCCCを除いても250人以上、手作りカナディアンカヌーは推定120艇を超えた。

(3)HCCCと市町村クラブの関係

HCCCと市町村クラブの関係は理解しにくい。HCCCをカヌー連盟のような統轄団体としてみるならばわかりやすいが、あくまでもひとつのクラブとして市町村クラブと対等の立場をくずそうとはしない。各市町村クラブではHCCCとの関係をどのように認識しているのだろうか。

「地域と流域という関係（美深APT）」

「レスキュー部として、HCCC主催ダウン・ザ・テッシーオーベツの運営に参加（ナヨロカヌークラブ）」

「地域クラブの連合会がHCCC。全員加入（サフォークランドカヌークラブ）」

HCCC内部でもこの関係のあり方については結論が出ていない。しかし、各地域を基盤とした市町村クラブに対してHCCCは「流域」であり、天塩川を基盤に各市町村クラブの交流の場を様々な形で提供していると言ってよいだろう。

(4)天塩川流域におけるカヌー・クラブ・ネットワークの可能性

HCCCは、天塩川全域にわたるイベント主催や、市町村クラブへの支援を通じて、強力なリーダーシップを発揮しているが、各地域をHCCCの方針に従属させようとはせず、カヌーをきっかけとして地域の独自性の発揮を促し、そこから生まれる様々な可能性に期待している。たとえば美深APTは「町おこし」のための異業種間交流の集団として生まれ、町の観光協会に所属し、木材流送の歴史をイメージしたイカダ下りを開催している。また、ウッデンカヌーワットサムは、旭川市や東京の自然教育団体との交流を通じて、北海道の自然や開拓の歴史を子供たちに伝えようとしている。さらに、地域アイデンティティの依所として天塩川を見直そうとする民間団体「天塩川ルネッサンス会議」は、カヌー・クラブではないがHCCCとは互いに支援しあう関係にある。

おわりに

天塩川流域におけるカヌー・クラブの実践のあり方は、都市生活者の「アウトドア」や技術に特化された競技カヌーとも一線を画している。それは地域固有の環境の中で醸成され、松村のいう「場所の内側性に気づかせるメディアとしてのスポーツ（『地域づくりとスポーツの社会学』道南書院、p.158）」として根づこうとしている。それを可能としているのが、天塩川を媒介としHCCCを交流点とした各市町村クラブのネットワークのあり方であるといえよう。

相撲社会を構成する
人的ネットワークに関する研究
—「タニマチ」のネットワークを中心に—

浅川重俊（筑波大学体育研究科）

〔問題の所在〕

相撲というスポーツは、これまでに社会学に限らず、歴史学、民族学など様々な領域で取り上げられてきている。しかしながら常にその視点は相撲のもつ様式や規範の特殊性に基づくものであったと思われる。つまり、これまでの相撲研究は相撲社会の様式や規範の中に「意味」を読み込み、付与することによって相撲社会を理解しようとしてきたのである。その結果、相撲社会は我々の日常の社会から遊離しているかのような印象が形成されてしまっているのではないだろうか。

そこで、相撲のもつ特殊性から離れ、これまでの相撲研究のような相撲社会の枠内にあった視点ではなく、相撲社会の枠を超えた全体像を俯瞰する視点で相撲社会をとらえてみたい。

〔方法論〕

山口昌男は、その著書『「挫折」の昭和史』（1995、岩波書店）において、具体的に人的ネットワークを読み解くことによって大正から昭和初期にかけて開花し、消えていった「モダニズム」の可能性を追及している。こうしたネットワークを具体的に読み解くという手法は、単に「派閥」や「人脈」などの言わば固定化した集団を系統的に把握する作業とは一線を画するものである。人的ネットワークは、主として個々人の主体性のもとに結び付き、形成されていく。よって、常にその全体像は拡張していく傾向があるし、様々な小さいネットワークどうしが複合的につながっているためその構成は重層的になっていく。

このような人的ネットワークを枠組みとして、相撲社会と外部社会との関係性を読み解いてみることにする。その中で社会全体からみた相撲社会の位置付けが明らかになってくるのではなかろうか。

〔対象〕

具体的な研究対象は「タニマチ」である。「タニマチ」は相撲社会を経済的に支えるパトロン的役割を果たしているのであるが、そういった「カネ」のつながり以外の関係も含めて、「タニマチ」及びそのネットワークが相撲社会と外部社会の関係性の中でどのような介在してきたか、また実際にどういったネットワークを形成していたのかを明らかにしていく。

〔事例〕

事例として、明治後期から昭和初期にかけての「タニマチ」を取り上げていく。

まず、「タニマチ」としてどういった人々がいたかについて述べていく。現在でも見られる「後援会」と呼ばれる組織としての「タニマチ」が誕生したのは、明治34年(1891年)

に黒岩涙香¹⁾の肝入りで「萬歳会」という会ができたのが最初である。その後、「常陸山会」や「角友会」などができ、大正の半ばには27,8の会が組織された。これらの後援会はそれぞれが支援する力士や部屋に対して巨額の金をつぎ込んでいた。

また、個人としては、古河虎之助²⁾や渡辺治右衛門³⁾などがいた。古河は大錦の晶廬であり、彼に故郷の大阪に土地を買い与えているし、渡辺は朝潮に別荘や車を送るといった派手な後援をしていた。

このようないわゆる「タニマチ」の他に、平沼亮三⁴⁾のように縁あって力士や部屋の親方と懇意になり個人的な交際をもつ者もいた。

本報告では、この平沼亮三をキー・パーソンとする人的ネットワークを明らかにしていくことを中心に進めていく。

- 1) 黒岩涙香(1862~1920)。本名周六。小説家、新聞社社長。代表作として「鉄仮面」「蔵王」などがある。「万朝報」の社主を務めながら自ら論説のペンを取ることもあった。「新橋俱樂部事件」の時には調停役も買って出た程の好角家でもあった。
〈川端要壽(1995) 関脇玉椿、徳間書店、東京、p111〉
- 2) 古河財閥3代目当主。1908年西郷従道の次女不二子と渋沢栄一の媒酌で結婚。政財界に華麗な交友関係を築く。
〈朝日新聞社(編)(1990) 朝日人物事典、朝日新聞社、東京、p1424〉
- 3) 10代目 渡辺治右衛門。実業家。二十七国立銀行、東京湾汽船などを継承。さらに渡辺倉庫、渡辺保険会社を創設。東京屈指の資産家であった。
〈同上書、p1793〉
- 4) 平沼亮三(1879~1959)。スポーツ功労者。1924年衆議院議員、1932年貴族院議員に当選して政界で活躍。財界では麒麟ビール、古河電機、玉川電車などの重役を歴任。スポーツ界でも体協理事、会長、ロスアンゼルス、ベルリン五輪の選手団長を務めるなど他方面に活躍。1955年文化勲章受章。
〈同上書、p1362〉

上 羅 廣
(上野学園大学)

はじめに

スポーツにおける技術は、ルールや用具、身体能力の発達によって変化すること、そして、その技術的基盤に身体や身体活動が位置づいていることは、言うまでもないことである。

スポーツに限らず、人間の生命活動のほとんどは、身体がその基盤になっており、したがって人間存在は、常に、当該社会における身体性や、当該文化における身体性の位置づけに規定されてきたと言える。※1

しかし、このような身体は、私達にとって余りに身近すぎるために、身体の動きという側面や、身体性に注意が向くことは、特殊な場合を除いて少なく、日常的には、その価値的側面に関心が集まることが多い。例えば、生産場面における「組み立て作業」という、ひとつの身体活動は、「作業」という「身体の動き」に対してではなく、価値ある製品を生み出すひとつの行程として関心が払われる。また、同じように、絵を描くという、ひとつの「身体の動き」も、筆の使い方や腕の動かし方に対してよりも、芸術的価値を創出する「芸術的活動」として位置づけられる。

一方、スポーツにおける「身体の動き」は、日常生活場面における「身体の動き」に対してよりは、「動き」そのものが「楽しみ」や「勝敗」に直接的に結びつき、「動き」そのものが価値の関心と大きくかけ離れることは少ない。しかしながら、そうは言っても、上手・下手、速い・遅いなどの価値的評価は、他の日常生活場面における「身体の動き」と同様になされる。つまり、物を作るのが上手、絵を描くのが上手、ボールを打つのが上手というように、いわば出来高評価がなされるのである。その意味では、スポーツにおける「身体の動き」だけが、特別というわけではない。

ただ、「身体の動き」が直接的に技術と関連し、「動き」そのものが技術に転化していくという意味において、また、そのために「動き」そのものに対する着目度が、他の「動き」よりは高いという、ふたつの意味において、「身体の動き」を身体技術として理解することが容易である。

これまで、スポーツにおける技術論は、多くの場合、スポーツ競技での実績を残した選手やコーチなどの先駆者達が、その成果である体験的知識をもとに、技術論を展開するというひとつの立場をとってきた。そして、近年では、そうした経験的知識の上に、自然科学的方法によって獲得された身体に対する知見が加味されるようになってきている。こうした技術論は、当然、身体と道具等の対象物との関係性や、ルールとの関係性、さらにはスポーツ競技の目的である「勝利」や「記録」に関連づけられて、より合理的な技術を蓄積し、新たな技術論を形成していく。

したがって、このような技術論は、「勝利」などの成果と不可分に結びつきながら、その正当性を強化していくことになり、ひとつの技術論が定着していく過程には、流行・廃

りなどの現象が内在していくことになる。

本発表では、このようなスポーツにおける技術論を身体と身体性という地平に引き降ろして、再考してみようと思う。それも、ここでいう身体とは、物質的な身体というだけではなく、「生きている身体」、「生身の身体」であり、歴史的・文化的規定を受け続けている身体である。※2

また、さまざまなスポーツ種目を全般的に論ずるには、本報告では限界があり、ここでは、テニスというひとつのスポーツ種目に限定して、その技術を再考することになる。

いわば、身体という視座からのテニス技術へのアプローチである。※3

テニスは、もともと、ジュ・ド・ボームと呼ばれて、手のひらでボールを打ち合うゲームとして、フランスで生まれたことは良く知られるところである。それが、約700年の間に、大きく変化し、イギリスのウィンブルドンで開かれた第1回の全英選手権大会(1877年)を境として、近代テニスが誕生した。※4 現代のテニスもまったくその延長上にある。その変遷の歴史をひもとくことは、興味がつきないことであるが、ここでは、ひとまず、禁欲することにして、本発表では、現代のテニスを中心的な題材とする。

※1 M. モース、『社会学と人類学』、(有地亨・山口俊夫共訳)、1976。また、野村雅一、『身体表現の民俗学』、京大人文学研究所報告所収、1979。野村、『しぐさの民俗学』、NHKブックス、1983は、このような観点を明確にしている。

※2 市川浩、『精神としての身体』、1975。

※3 とくに、ここではテニスの技術を普通のプレイヤーを対象にして考えている。「生きた身体」を視野に入れるためには、一流のプレイヤーよりも普通のプレイヤーの方が適切である。また、発表者は日常的に、学生や社会人の普通の人たちに、仕事上またボランティアで、テニスの指導をしているとともに、30歳過ぎからテニスを始めた普通のプレイヤーである。

※4 福田雅之助他編著、『図説テニス辞典』、1973においては、イギリスのウィンフィールド少佐が、1873年12月に、はじめてテニスのルールの本を公開したことをもって、近代テニスの始まりとする説もあるが、その時点ではコートは台形を2つ合わせたようなものであり、ここではこの説を取らない。

I テニス技術への理解と身体

1. テニス技術への理解
2. 「ラケット革新」と身体性の変化

II テニス技術と「媒介身体」

1. 媒介の接点としてのグリップ
2. タッチ感覚とストリングス
3. その他の「媒介身体」

III テニス技術と身体の癖

1. 初心者への指導と身体の癖
2. テニス技術とスポーツ選手の身体の癖

IV テニス技術とコミュニケーション

※ 急遽、発表が決まったため、「抄録集」に「抄録」のかたちで、掲載する準備が間に合わず、申し訳なく思います。おおよそ、左の目次の内容をアレンジして、本発表するつもりですので、ご理解いただきたくお願いいたします。

スポーツ番組制作のフィールドワーク

ーメディア・スポーツの新たな研究視角ー

筑波大学大学院 橋本 政晴

はじめに

今日、スポーツとマス・メディアの関係において、オリンピックを中心とした放映権料の高騰問題¹⁾や、その強まるメディア支配に関わる問題²⁾が顕在化してきている。もはやスポーツはテレビのソフトとして欠かすことのできない存在であり³⁾、我々のスポーツ環境⁴⁾だけでなく、価値観やライフ・スタイルにまで影響を及ぼすものとしてみなすことができるであろう。

体育・スポーツ社会学の領域におけるメディア・スポーツに関する研究は、テレビ・メディアが登場・普及した1950年代に出現した。近藤ら⁵⁾による一連のスポーツ報道の量的内容分析では、幅広く様々なスポーツの情報が提供されているものの、プロ野球や大相撲などへの偏りが見られたことが指摘された。それは、同時期の大西ら⁶⁾の研究と同様に、マス・コミュニケーションの進展に伴う体育・スポーツへの影響を危惧し、スポーツ報道の受け手の反応を実態調査より検討するものであった。

その後の古屋ら⁷⁾の一連の研究や、川口⁸⁾、新井野⁹⁾、梶原¹⁰⁾、金本¹¹⁾の研究は、メディア・スポーツの受け手を対象とした実態調査を中心にその視聴構造を明らかにすることを試みている。そこでは視聴者は多様な視聴構造を有していること。それを規定するのは様々な要因が複雑に絡み合っていること。そして、それが体育・スポーツへの参与に直接的に影響を及ぼす側面と、そうでない側面があることが指摘されている。

次いで、メディア・スポーツに記号論を適用することで、その隠されたメッセージを読み取ることを試みている橋本¹²⁾、清水¹³⁾の研究が出現する。彼らはメディア・スポーツをイデオロギーの産出や再生産の装置として、また神話作用を担う一端として論じている。

しかし、メディア・スポーツを「送り手ー受け手」の関係に捉え直すと、生産の現場つまりマス・コミュニケーション研究でいわれるところの送り手に焦点をあてたものが、先行する諸研究ではほとんどみられない。特にその現場のメカニズムやそこに生きる人びとのなまの姿を明らかにしたものは皆無である。よってメディア・スポーツの制作の現場に筆者が自ら赴き、そこに生きる人びとに特有の文化や規範を学ぶことを出発点とし、そこで得た印象や直観に基づいて、彼ら自身が用いる言葉や物の観方を借りて描くことが有効であると考え、その方法を「フィールドワーク」¹⁴⁾に求めた。

事例報告

メディア・スポーツの中でも特にテレビ・スポーツを対象として、1995.2.15～4.26および10.18～12.20にかけて、T放送局のスポーツ番組の制作現場のフィールドワークを行った。本報告は、現場の参与観察や彼らへのインフォーマルなインタビューを基にして、メディア・スポーツの制作現場に働くメカニズムとそこに生きる人びとの姿の特徴について発表する。

報告の要旨は、1 調査の概要、2. 中継番組の制作現場から、3 ニュース番組の制作現場から、4. まとめにかえて、である。報告にあたっては、報告要旨、資料を配布し、VTRを用いてその説明を行う予定である。

参考文献

- 1) 例えば、篠原俊行(1995)「スポーツと現代メディア」有山輝雄・津金澤聰廣(編)『現代メディアを学ぶ人のために』pp.193-196 世界思想社。など。
- 2) 例えば、岡崎満義(1992)「巨大メディアは暴走しやすい」サントリー不易流行研究所(編)『スポーツという文化』pp.70-77 TBSブリタニカ。など。
- 3) メディア総合研究所(編)「スポーツ・ジャーナリズムに今なにが問われているか」『放送レポート』133:20-33。
- 4) 中村敏雄(1995)『日本的スポーツ環境批判』pp.42-48 大修館書店。
- 5) 近藤衛ほか(1957)「体育とマス・コミュニケーション(第1、2報)」『九州大学体育学研究』2-1:21-59。(1958)「体育とマス・コミュニケーション(第3報)」『九州大学体育学研究』2-2:25-33。(1960)「スポーツ新聞及び週刊誌のスポーツ記事の内容分析と読者の反応」『福岡学芸大学紀要(教職系統)』10-4:129-138。
- 6) 大西国男ほか(1966)「中学生のマス・コミ接触とスポーツの関心について」『茨城大学教育学部紀要』16:283-304。(1967)「父兄のマス・コミ接触とスポーツの関心について」『茨城大学教育学部紀要』17:209-229。
- 7) 古屋正俊ほか(1982)「テレビ・スポーツ論ーその送り手についてー」『体育の科学』32-2:233-236。(1984)「テレビスポーツ番組の“面白さ”について」『上智大学体育』17:53-62。(1984)「スポーツへの関与に及ぼすコミュニケーションの影響に関する考察」『体育・スポーツ社会学研究』8:99-121。(1984)「テレビスポーツ番組の視聴行動に関する研究」『第35回日本体育学会抄録集』:131。(1985)「テレビスポーツ番組の視聴行動に関する研究(2)」『第36回日本体育学会抄録集』:145。
- 8) 川口晋一(1990)「テレビのスポーツ中継視聴者の充足感に関する研究」『体育・スポーツ社会学研究』9:79-99。(1993)「『スポーツ鑑賞』研究の今日的課題」『運動文化研究』10:46-61。
- 9) 新井野洋一(1991)「Spectator Sports需要者の意味体験」『愛知大学体育研究室体育学論叢』3:13-25。
- 10) 梶原勝美(1983)「大学生の『みるスポーツ』における情報化に関する一考察」『専修大学体育研究紀要』9:35-47。
- 11) 金本益男(1990)「スポーツ視聴行動の心理的要因に関する研究(1)」『東京都立大学体育学研究』15:59-64。
- 12) 橋本純一(1985)「メディア・スポーツに関する研究Ⅰ」『第12回東京体育学会報告配付資料』。(1986)「メディア・スポーツに関する研究Ⅱ」『筑波大学体育科学系紀要』9:43-52。(1988)「メディア・スポーツとイデオロギー」『体育・スポーツ社会学研究』7:55-68。
- 13) 清水論(1987)「スポーツの神話作用に関する研究」『体育・スポーツ社会学研究』6:215-232。(198)「甲子園野球の神話分析」『体育・スポーツ社会学研究』8:27-49。
- 14) 佐藤郁哉(1984)『暴走族のエスノグラフィー』新曜社。(1992)『フィールドワーク』新曜社。

※紙幅の都合上、注に掲載した各論文の副題については省略させていただきました。

＜はじめに＞

高度情報化社会と言われる今日では、パーソナルコンピュータが急激に普及し、大学や研究機関のものであったインターネットを会社や自宅で利用する一般の人が増加の一途を辿っている。インターネットには、世界中どこにでも瞬時に文章ファイルを送信できる「電子メール（E-MAIL）」機能、いろいろなテーマをインターネット上で世界中のユーザーが参加して議論したり、情報を交換する「ニュースグループ（NEWS GROUP）」機能、そしてさまざまな形式のファイルを欲しい時にインターネット上の他のコンピュータから転送できる「ファイル転送（FTP）」機能がある。またいっぽうその他に一般に広く知られているのがWWWという機能である。

このWWWは「画像や音声などを含むいわゆるマルチメディアファイルを提供するサーバ」である。WWWでは画像や音声を世界中に送受信できるため、スポーツの情報ははじめ国家機関の情報公開、企業の宣伝から個人の紹介にまで広く利用されるようになってきている。スポーツの情報はその関心の高さからWWWのイエローページであるYahooの検索機能を用いてsportsを検索すると1996年1月14日現在で1,271件、さらにsportsとJapanを同時に検索する33件見つげられた。これら検索されたページは、自ら登録する必要があるのも、おそらくこの件数以上のページがインターネット上に存在していることが推測される。

今回は、WWW上で1995年3月から情報提供を実施している2002年ワールドカップ日本招致委員会のホームページ(http://www.coara.or.jp/WC_Japan_2002/)を事例に取り上げ、スポーツ情報とWWWによる情報提供について検討する。

＜目的＞

2002年ワールドカップ日本招致委員会が提供しているホームページは、1996年6月1日に決定されるサッカーの世界最大級のイベントである2002年ワールドカップの日本招致を目的として世界の人々に情報発信されている。

ホームページの内容は、大きく分類すると日本の招致活動のニュースであるBreaking News、そして古くなったニュース記事や立候補都市の横顔が紹介してあるData Bank、さらに日本にワールドカップを招致する10の理由が述べられている10 Reasons for Japanに分けられている。また世界のサッカーを統括する団体であるFIFA（国際サッカー連盟）のホームページともリンクが張られ、直接クリックすることでFIFAのページにつながるようになっている。

以上のような2002年ワールドカップ日本招致委員会のホームページは日本開催に向け、日本の開催意欲を世界にアピールして世界の人々の賛意を得ることや、21世紀の情報技術を先取りした形での新しいスポーツ情報の発信の仕方を提示している。

またワールドカップUSA'94の情報テクノロジー部門のバイス・プレジデントをつとめたJuan Jose Vidal氏はインタビューのなかで「スポーツはエンタテインメントの面だけではない。情報源であることを見落としている。テレビを通してゲームを見、その後で裏

話などの情報を得るために新聞や雑誌などを読む。そして、自分の見聞きしたことを友人と会話して楽しむわけだ。」とスポーツ情報の価値を認識し、日本がFIFA（国際サッカー連盟）に提出した開催提案書を「ワールドカップというイベントそのもの、Information Technologyそのものをグローバルにとらえていることが十分に感じられた」と評価している。²このような2002年のワールドカップ時における情報テクノロジーを視野に入れ、積極的なWWWを利用している2002年ワールドカップ日本招致委員会の広報活動の状況を把握し、その現状を検討することが本研究の目的である。

＜方法＞

☆WWWを通じたデータ検索

2002年ワールドカップ日本招致委員会が提供するホームページのアクセス状況をプロバイダとなっている大分県のコアラネットの統計情報から調査し、開始時から現在までのアクセス状況を分析する。

＜結果＞

詳細は発表時にゆずるが、ホームページ開設から毎月約2,000～3,000のアクセス数をカウントしている。アクセス状況は、ホームページの内容の更新やその他サッカーイベントの開催等の外乱的な要因によって左右されていた。

＜参考文献＞

- *1 岩谷 宏、『基礎からわかるインターネット』p176、ちくま新書、1995
- *2 「特別インタビュー ワールドカップUSA'94の情報テクノロジーをリードしたホアン・ホセ・ビダル氏に聞く」、pp.46-49、月刊NEW MEDIA、1996/2、Vol.148

